肖像 ～九州・沖縄

技術者魂 介護機器に結実

徳永装器研究所社長　徳永　修一氏

医療福祉ベンチャー企業の徳永装器研究所（大分県宇佐市）は世界初の自動タン吸引器を開発して注目される。「技術者としての人生で何かを残したい」。大手企業を退職し、同社を創業した社長の徳永修一（62）を製品開発に駆り立てるのは、人間の生きざまへの強い思いだ。

タン吸引器開発 製品化まで10年

寝たきりで人工呼吸器を装着するALS（筋萎縮性側索硬化症）などの難病患者にとって、タンの除去は命に関わる。だが、自力で吐き出せないタンを1～2時間おきに吸引する作業は患者や介護者にとって大きな負担だ。徳永が大分県内の医師らと共同開発した自動吸引器を使えば、「患者の苦痛と介護者の負担を大幅に軽減できる」。

開発着手から製品化まで10年かかった。医師から試作器の製作を依頼され、断りきれずに引き受けたが、「当初は試作器だけのつもりだった」。ところが、厚生労働省の担当者から製品化を要請され、苦難の道が続く。安全性や有効性の確立に苦心し「何度もやめようと考えた」。医療機器製造業の許可取得や製品の薬事承認など規制のハードルも高く、2010年にようやく販売にこぎ着けた。

徳永の生まれは宇佐市。1971年に大分高専を卒業し、日立製作所に入社した。山口県の柳井工場を経て、新潟県の中条工場でATMや空調機の設計技術者として活躍した。しかし、帰宅して夕食後、再び会社に戻り、深夜まで働く毎日。「この生活をずっと続けるのはどうか」との思いが募っていった。

たまたま立ち寄った書店が徳永の未来を変えた。障害児用道具の工房を立ち上げた佐世保高専OBの本を見つけ、「技術者にはこんな生き方もあるのか」と考えさせられた。将来は地元に戻りたいと思っていた徳永は35歳で退職して宇佐市へ。起業を模索して同工房も訪ねてみたが、福祉で食べていく困難さを痛感。起業はあきらめ、地元の電子部品会社に再就職した。

福祉への関心がよみがえったのはそれから10年後。友人の兄がALSになり、大分県の患者会への技術的支援を頼まれたのがきっかけだ。1年ほど手伝い、「自分の力を福祉分野で生かせそうだ」と確信。再び退職し、福祉機器の開発に乗り出す。

人生で何残すか 自問を続ける

最初の2年間は収入がほとんどなく、「妻がパートで支えてくれた」。当時開発したのは重度の障害者がまばたきや口の動きで身の回りの機器を操作するスイッチ類や、入院患者がベッドから離れるとナースセンターに知らせる離床通報器など。00年に介護保険が始まり、「介護機器のレンタルが増え、ようやく経営が軌道に乗った」。

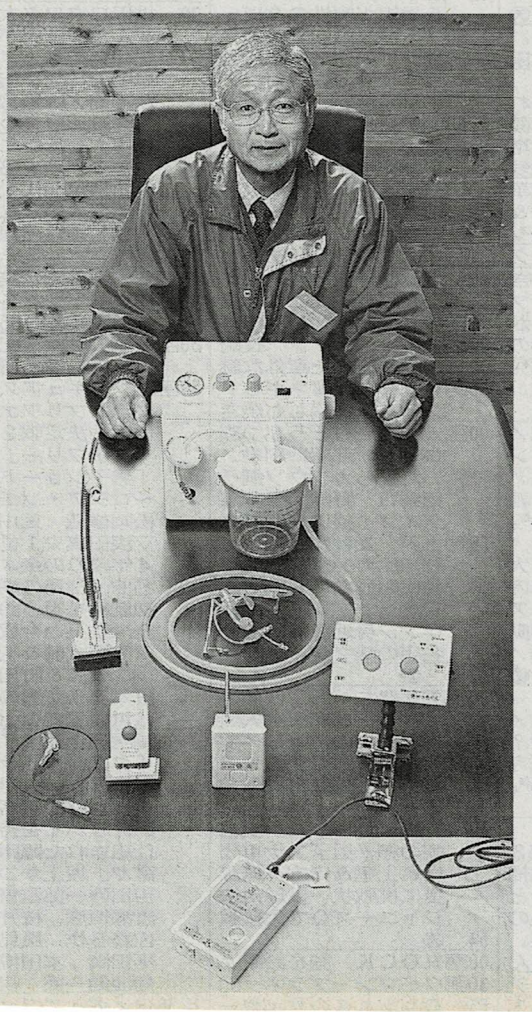
徳永の人生に影響を与えたのは高専時代の校長講話だ。クリスチャンの校長は毎週の講話にカール・ヒルティの「幸福論」や内村鑑三の「後世への最大遺物」などを取り上げ、「いかに生きるべきか」を考えさせた。卒業後も「何がやりがいのある仕事か」「人生で何を残すか」を自問し続けた徳永は講話の冊子を今も大事に持つ。

当面は経営者の仕事に全力投球する。しかし、「いずれは誰かに任せ、生涯現役で技術者をやりたい」。徳永が追い求める「人生の足跡づくり」はまだ道半ばだ。

大分支局長　谷川健三

＝敬称略

写真　善家浩二



とくなが・しゅういち　1950年（昭25年）大分県宇佐市生まれ。71年大分高専卒、日立製作所入社。85年日本抵抗器大分製作所（宇佐市）入社。96年に退職して福祉機器の開発に着手。97年徳永装器研究所を設立して現職。